

中国日本商会

みつま

三渚先生の

「ナルホド中国、ナットク中国」



三渚コラム 中国「津津有味」-11

中国人に対する誤解の一つに「初対面から人のプライバシーに関する事柄を根掘り葉掘り聞く、不躰だ、失礼だ」というのがあります。この問題に関する誤解の弊害は甚大で、日本人の中国人に対するネガティブな印象の相当部分を構成しています。一方、中国人もこれが原因でひどく傷つくことがあるのです。

中国人と付き合いがあったことがある人なら必ず経験するのが、中国人が自分でタバコを吸うとき、必ず人にも勧める行動です。周りに複数の人がいると、まとめて数本を手にして「ホレ、ホレ」と勧めることもあります。宴会の席でも、自分が吸うときは必ず先に両隣り、さらにはもう一人向こうの人にも勧めたりします。

中国でも最近では嫌煙が普及して、禁煙の宴会さえありますが、この習慣はすでに社会に浸透しきっていて、日常の行動、例えば会社の休憩室、路上などどこであろうと、たばこさらにはのど飴でも、自分が吸ったり舐めたりするときは必ずそばにいる人に先に勧めます。昨年、当会で講演させていただいたときもこの話をして、「ほかの話は忘れても、この話だけは職場の周りの人に伝えてください」とお願いしましたが、中国に駐在している方ならこれはもうイロハですから、「今更言われなくても」と思われるのが当然です。それなのになぜ私が失礼も顧みず強調したかということ、そうする深い意味をよく知っておく必要があるからです。

中国人にとってこの世を渡り歩くのに最も大切なもの、それは人間関係とお金です。2000年に及ぶ厳しい封建時代、加えて近世以降1911年まで続いた清朝による異民族統治、庶民は自分たちの生命・家族・財産を守るためには“找关系”「ツテを求める」ことがなにより重要で、“宗親譜”「家系図」をよりどころとした氏族集団などの“熟人圈子”「親しい人間関係」はその最たるもの。さらに、権力者とは常に良い関係を保つために普段からそれなりのもてなしをし、“找关系”のよりどころとして確保しておく、それにはお金が必要です。「地獄の沙汰も金次第」はちょっと表現がきついかもかもしれませんが、「魚心あれば水心あり」、世俗社会のこの道理を最もよく心得ているのが中国人でしょう。

ですから、たばこなどを進めるのは「私はあなたを大事な人だと高く評価しています。是非お近づきになりたい」という意思表示であり、逆にそれをしないことは「お前など、路傍の石ころと同じ、何の価値もない人間だ」と面と向かって意思表示しているわけですから、これほど失礼な話はなく、相手の中国人にすれば、心中穏やかでないことは当然です。どんなに相手をほめそやしても、勧めない行為一つですべてがおじゃんになります。

2008年、北京オリンピック開幕を目前に控え、人民日報第一面に国民に注意を喚起する記事が掲載されました。その大意は「これからたくさんの外国人が中国を訪れる。我々中国人は、初対面ならいろいろ根掘り葉掘り尋ねて、自分がいかに相手を重んじ仲良くした

中国日本商会

みつま

三渚先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



いと思っているかを示すのが礼儀だ。しかし、外国人の中には、そういう行為を「初対面から人のプライバシーに踏み込んでくるのは失礼だ」と思う人たちも多い。気を付けよう」というものでした。この違いを理解しなければ、誤解が生じるのも当然ですね。